

氏名(本籍)	いけだまりこ 池田真理子(福岡県)		
学位の種類	博士(芸術学)		
学位記番号	博甲第5131号		
学位授与年月日	平成21年3月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	日本画における貝殻胡粉の研究 - 貝殻を原料とする炭酸カルシウム系白色顔料の分析と使用方法 -		
主査	筑波大学教授	博士(芸術学)	守屋正彦
副査	筑波大学教授	博士(芸術学)	齊藤泰嘉
副査	筑波大学教授		藤田志朗
副査	筑波大学講師	博士(学術)	松井敏也

論文の内容の要旨

(目的)

本研究は、日本の絵画に用いられてきた貝殻胡粉の、絵の具としての研究である。貝殻胡粉は日本の風土に根付いた天然の白色顔料で、広く用いられているにも関わらず、実態が明らかでないのが現状である。狩野派や土佐派によって用い方についての基本見解が示されて以後、近代に至るまでその踏襲に留まり、基礎的な胡粉の特性について、これまで科学的な根拠を得て貝殻胡粉の現状や現在に至る経緯を明らかにしては来なかった。この経緯に鑑み、著者は貝殻胡粉の性質を知り、自己の日本画制作の指針とするため、貝殻胡粉についての歴史的な表現方法、また絵の具としての用い方について科学的な顔料研究を中心に考察することを目的としている。

(対象と方法)

研究の対象としたのは、日本画顔料として用いられる、イタボガキ・ホタテ・ハマグリ貝を原料とする貝殻胡粉である。またその展開として、それぞれに分級された製品、溶き方の異なるもの、現在用いられていない過去の製品等を対象とした。白色顔料としての比較には、鉛白や白土等の白色顔料、貝灰を選択した。

貝殻胡粉は、最も基本的な日本画顔料で、現在では原料不足によって希少な天然顔料になりつつある。本研究では、過去から現在の文献による貝殻胡粉の変遷の調査、聞き取り調査による製造過程や溶き方の比較、分析機器による製品の差の明確化を試み、それらの結果から豊富な貝殻胡粉製品それぞれの性質を推測し、日本画制作者としての視点から、実作品への効果的な使用を試み、絵の具としての用い方について章を立てて検討を行った。本論は、序章と、第一章から第四章までの分析や調査、それらをまとめる終章から構成される。まず第一章では、文献や実地調査を基に、貝殻胡粉の基本的な情報である、歴史・原料・種類・製造過程・溶き方などの基本的な概要を述べた。第二章では、種類や溶き方の異なる貝殻胡粉やその他の白色顔料について分析機器による調査を行い、それぞれの性質を比較した。まず塗布試料の色測定・光沢度測定を行い、次に粉末試料の元素組成・鈹物組成・熱分析・粒子形状・粒度分布の測定を行った。その結果から製品本来の性質を追及すると共に、色や光沢の差を引き起こした原因を検討した。また附記として膠液の吸収

量の測定を行った。第三章では、七ツ判、粒胡粉、本代胡粉等の過去の製品や、貝殻胡粉と混同されがちであった貝灰について第二章と同様の分析を行い、現在の製品との比較を行った。また過去の文献に見られる腐れ胡粉、方ドメ胡粉、具としての用い方など、伝統的な用法を同様に調査した。第四章では、主に自作に用いた貝殻胡粉の展開と、新たな用い方の可能性について検討した。本研究で得られた結果をふまえ、貝殻胡粉を効果的に用いるための塗布実験を行い、それらを具体化させるための作品制作を試みた。また概要的ではあるが、過去の代表的な日本画作品をあげ、他作品を用いて貝殻胡粉の基本的な用法を確認した。最後に終章では本論の結果を横断的に考察し、結論を述べた。

(結果)

著者は本研究の成果として次の三点を明らかとしている。一つ目は貝殻胡粉の原料や等級による性質の差が確認され、これらを作品上で使い分けることで有効な結果が得られたこと。二つ目は近代以降脆弱であった貝殻胡粉研究に対し、本研究では自作を媒体にしながらではあるが体系づけを行い、貝殻胡粉を学問上に位置付けることができたこと。三つ目はホタテ原料への誤認、「灰汁抜き」の概念、過去の製造時の燃焼等、これまで触れられてこなかった点や誤認されてきた点を浮き彫りにすることができたことであり、従来口伝のように申し送られ常識とされてきた胡粉の用い方を修正する結論を得た。

(考察)

研究では胡粉の科学的な分析を行い、それを作家自身の実制作へと応用することによって絵の具として性質、その用い方を明らかにした。ただ現今の作家による貝殻胡粉の使用方法や、附記に記すに留まった膠と胡粉の関係が残されている。どちらも作品制作を媒体とする貝殻胡粉研究には欠かせない要素であるため、これらについての調査研究がこれからの課題である。

審 査 の 結 果 の 要 旨

胡粉は古代から近世、近代にいたる長い歴史を有する白色顔料で、やまと絵の主流で中世の宮廷で活躍した土佐派、幕府の御用絵師であった狩野派がその用い方を伝承して来た。かかる用法の記録は『丹精指南』などの近世に著された技法伝授の書に見られるところであるが、実際には師弟間での実際的な経験のやり取りによって継承されてきたものと考えてよいであろう。白色の顔料は胡粉以外にも鉛白や白土があるが、歴史的に概観した場合、変色が見られず、肌理も細やかな胡粉はすぐれた絵の具として広く用いられてきたことがうかがえる。

白色を日本画に生かす場合、その根本の絵の具としての胡粉の研究は近代以降、十分に研究されてきたわけではなく、近世からの用い方をそのまま受け継いできた観がある。著者は現在の胡粉生産の実態を調査し、貝殻胡粉における顔料としての性質を科学的に検討して、現在に用いられている貝殻胡粉の、この分野では初めての顔料研究を行ったもので、その具体的な分析成果をもとに自身の日本画制作に応用し、その使用例もあげて研究成果としている。

従来の表現および技法の経験的な用法と比較して、著者による貝殻胡粉の分析並びに用法、さらに実制作は胡粉での表現を目指す後進に指針を与えるすぐれた論考といってよいであろう。

今後、古画の再現や近代日本画の胡粉使用の例示等、更なる標本数を示し、決定版としての貝殻胡粉の研究を期待したい。

よって、著者は博士(芸術学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。